



Title	<文献紹介>国家文書と条約集
Author(s)	秋月, 孝子
Citation	スラヴ研究, 38, 142-151
Issue Date	1991
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5200
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000113331.pdf



[Instructions for use](#)

『国家文書と条約集』

Собрание государственных грамотъ и договоровъ хранящихся въ Государственной коллегіи иностранныхъ дѣлъ. (Издание документов по рус. истории Архива Мин-ва иностр. дел, предпринятое Комиссией печатания государственных грамот и договоров)Часть 1—5. Москва, 1813—1894.

秋 月 孝 子

I はじめに

スラブ研究センターでは、1985年に『国家文書と条約集』の第1～4巻をオリジナル版で購入しました。欠巻の第5巻についても、東京の「文献社」片山醇之助氏に補充を依頼していたところ、昨年末同氏のご好意でその巻のゼロックス版を作成して寄贈していただき、漸く全巻を揃えることが出来ました。*第1～4巻のオリジナル版は44×28cmの大型本ですが、第5巻は28.5×17.5cmの縮刷版です。本書のマイクロ・フィッシュ版がIDCから出版されています。

本書はロシア帝国外務省文書館所蔵の文書から編集されたもので、東北ロシア諸公国分立時代の13世紀初頭からピョートルI世の西欧訪問の前年にあたる1696年までの文書を含んでいます。本書の編纂は、19世紀初頭の商務大臣として有名な政治家であったН. П. ルミャンツェフ伯爵(Н. П. Румянцев, 1754-1826)の発議で1811年に設けられた国家文書及び条約集出版委員会(Комиссия печатания государственных грамот и договоров)により進められ、第1～4巻は1813～1828年に刊行されました。しかし第5巻が刊行されたのは第4巻から60年以上も経た1894年のことで、その間には編集者や編集方針の変更があり、必ずしも当初の目的がそのまま達成されたわけではありません。とはいえそれはロシアの国家文書編纂の最初の試みとして大きな意義を持っています。各巻の内容は、第1巻は1265年からロマノフ朝成立の1613年まで、第2巻はその補遺で1229～1612年、第3巻は1613～1655年、第4巻は1656～1696年の主として国内関係の文書が年代順に排列されています。第5巻は1326～1584年の外交関係文書で、全5巻を通して1,039の文書が収録されています。これらの中には、13～16世紀の宗教及び条約関係文書、16～17世紀の勅令、16～17世紀の全国会議(Земский собор)関係文書、帝室関係法令、タタール汗のロシア諸公への統治に関する命令書、世俗及び教会の領主、大商人、種々の都市への特権許可状、16～17世紀のモスクワ時代の地方行政典範による関税法令、通商法令、1632～34年、及び1654～67年のロシアとポーランド戦争の文書など、また第5巻には14～16世紀の主としてイワンIII世からイワンIV世の時代の外交文書(こ

の種の文書は第1～4巻の中にもいくつか含まれている), 例えばポーランド＝リトワ国家, オーストリア, 英国, デンマーク, スイス, リヴォニア, トルコ, クリミア, カザン汗国, ノガイ汗国などとの関係文書が含まれています。これらすべての文書は, 各巻毎に年代順の一連番号が付され, 各文書には短い内容を表わす標題がつけられています。例えば第5巻の第8文書は1488年7月20日付イワンⅢ世からハンガリー王マーチャーシュⅠ世宛〈ポーランド王カジミェシュに対する開戦について〉, 同第9文書は, 同年7月27日付ハンガリー王マーチャーシュⅠ世からイワンⅢ世宛〈ポーランド王カジミェシュに対する共同作戦の同意について〉, 同第113文書は, 1557年4月28日付英王フィリップからイワンⅣ世宛〈英露貿易関係についての回答〉のようにその内容が示されています。

以上のように, この文書集はいまだ完全とは言えなくとも, *Акты исторические* (тт. 1–5, & указатель. СПб., 1841–43), *Дополнения к Актам историческим* (тт. 1–12. СПб., 1846–75), *Полное собрание законов Российской империи*. [Собрание] 1–3 (СПб., 1830–1916) などの先駆となったものです。とくにルミヤンツェフ伯がもっとも重視した外交文書の編集は, そのまま実現はしなかったとはいえ, 当初は外国文書の原文の印刷さえ意図したほど意欲的なものでした。ここでは, この記念すべきロシアの『国家文書と条約集』全5巻が揃ったのを機会に, 主として第1巻及び第5巻の詳細な序文に基づき本文と対照しつつ, 本書出版の意図と経緯を紹介したいと思います。

* (第5巻のコピー版は, 片山氏がフランスのメドン図書館から入手したマイクロフィルムを, 日本マイクロ写真KKで焼き付けて原版を作成し, それをゼロックス版にしたものです)

II 出版計画

H. П. ルミヤンツェフ伯による第1巻の序文には, 1811年5月3日付のアレクサンドルⅠ世宛の11ヵ条の計画を含む上奏文が引用されています。その中で彼は本書刊行の目的を次のように述べています。「外務省に勤務する官吏たちの教育を促進することを願って, また同じく世の中に有用な情報を普及することを願って, 私は以前からわが国の外交文書全集を刊行することが必要であろうと考えておりました。それは外務省文書館に保存されているロシアの国家文書及び列強諸国との外交文書をデュモンの著作にならって刊行することです」。すでにヨーロッパ諸国では18世紀中に, ライマー (Riemer, London, 1704–26. 20 vols.)¹⁾, デュモン (Dumont, J., Amsterdam, 1726–31. 8 vols.)²⁾, バルベイラク (Barbeyrac, J., Amsterdam, 1739. 2 vols.)³⁾ やマルテンス (Martens, G. F. v., Gottingue, 1791–1801. 7 vols.)⁴⁾ 等の学者達が国家の文書館から重要な法令や条約の文書を抜きだして編集し, 各国の歴史と外交に大きな貢献をしていたということです。ルミヤンツェフはさらに文書の公刊が歴史事実を主張することに役立つことを述べ, 次のような例をあげています。「ロシアの改革者ピョートルⅠ世は, 使節局の文書庫に保存されていた1514年8月4日付の神聖ローマ帝国マクシミリアンⅠ世からヴァシーリー・ヨアノヴィッチ大公宛の金の印章のある文書を読み, その中で〈インペ

ラートル) (Император) の称号がロシアのツァーリに認められていることを知って、1718年このドキュメントをロシア語・仏語・独語・オランダ語の翻訳付きで印刷して配布することを命じました。この文書はピョートル I 世がインペラートルの称号を名乗るための第一の基礎になったものであります。当時各国がこのことを認めることに難色を示した時、その証拠として見つけだされたのは、フランス、イスパニア、スウェーデン、ドイツの選挙侯、ブランデンブルグ辺境伯からの文書でした。それらはピョートル大帝より200年も前に種々の形でロシアのツァーリを〈インペラートル〉と呼んでいたのです。これらの証拠のおかげでそれ以後は〈インペラートル〉の称号について反対はなくなりました。このことから明らかなように、文書の保存は国の歴史を形成する上にも重要な役割を果たすものであります」。

この文書の目的のためにルミャンツェフ伯が集めた資料と、アレクサンドル I 世への上奏文の内容は驚くほど詳細なものです。当時のロシアが対仏戦争の戦費の支出で国庫が相当に苦しい状態にあったことなども、この出版事業に関するルミャンツェフの上奏文から窺い知ることができます。ルミャンツェフは「本書第1巻の印刷費用は、初刷りを1200部に限定しても25,000ルーブル以上が必要となります。厳しい儉約令を考慮すれば、私が陛下に請願する権限があるとは思われませんが、第1巻の出版費が国庫によって支出されることを、恵み深き陛下の恩寵にすがってあえて要請する次第です」と述べています。以下はルミャンツェフの上奏文中にみられる11ヶ条の出版計画案です。

- (1) 本書の出版は個人の企てではなく、公的出版物とする。
- (2) そのために外務省のモスクワ文書館に、本書出版の特別委員会を設置する。
- (3) この委員会の委員長には、4等文官 Н. Н. Бантоуишчу=カメンスキー (Н. Н. Бантыш-Каменский, 1737-1814) を任命する。委員会はバンтоウишчу=カメンスキーの監督の下に1人の主監と2人の官吏から構成される。主監の年俸は600ルーブル、2人の官吏にはそれぞれ50ルーブルを国家の一般会計から支出する。
- (4) この委員会の主監及び2人の役人の指名は、外務大臣に委任する。
- (5) 本書のタイトルは *Собрание государственныхъ грамотъ и договоровъ* とする。
- (6) 国家文書集は、陛下の意志により出版されるものであるから、検閲は免除される。
- (7) 本書の販売は、各冊毎に官印を押すために外務省のモスクワ文書館においてのみ行う。
- (8) この文書集の第1巻が売り切れる前に、それを民間において小型版で出版することを禁止する。印刷業社が上記のオリジナル版を1200部以上印刷した場合は罰金を課す。
- (9) 第1巻の売却により得られた収入は委員会に保管する。それをもって本書の出版が継続される。
- (10) この企画が完全に終わったところで、本書からの売上金と利潤は、外務省のものとなる。この金の使用の全権は私(ルミャンツェフ)に委任される。

(11) 本書の1200部のうち、50部を陛下への贈呈と私の個人のため保留しておく。

この上奏文は1811年5月上旬アレクサンドルⅠ世の裁可を得て、〈国家文書と条約集特別委員会〉が設置されました。この委員会は外務省のモスクワ文書館の一部として、H. П. ルミャンツェフの指導の下に発足し、そこで行なわれたロシア帝国内外文書の編纂事業はその後のロシア古文書学の発達に大きな影響を与えることになりました。編集責任者となったH. H. バントゥイシュ=カメンスキーは、ロシア・ウクライナ史家であり、古文書学者で、ルミャンツェフの皇帝への上奏文作成に際して詳細な資料を提供し、本書刊行の事実上の立役者でもありました。そのことは本書刊行をめぐってルミャンツェフ伯と彼との間で取り交わされた往復書簡から明らかです。当初の計画では『国家文書と条約集』は、外交関係文書の編集に重点をおいていたが、実際の刊行に際してはまず第1巻を1726年（ピョートルⅠ世の死の翌年）までの国内関係文書にあて、第2巻以降を外交関係文書にあてることになりました。かくて1813年に主として国内関係文書を収めた本書の第1巻が出版されましたが、時あたかもナポレオンの大軍がモスクワを占領し徹退した直後のことでした。

Ⅲ 第2巻の準備

第2巻の編集は1813年に始められました。編集の開始にあたってバントゥイシュ=カメンスキーは8ヶ条の計画をルミャンツェフ伯に提出しました。その時ルミャンツェフ伯は外交文書の排列を国名のアルファベット順ではなく、年代順に編集することをカメンスキーに希望しました。カメンスキーはルミャンツェフの意見を受け入れて、編集計画の変更に同意し（1813年5月13日付書簡）、第2巻の最終編集計画は同年7月23日付のカメンスキーの書簡でルミャンツェフ伯に提出されました。引続きカメンスキーは第2巻に収録されるべき文書のコピーを、点検のためルミャンツェフに送りました。カメンスキーは上記に対する回答を受け取らないうちに、さらに第3巻の原稿となる Nos. 447-730の文書をルミャンツェフに送付し（1813年10月14日）、同封の書簡の中で次のように書いています。「今や私の側からなされるべきことは、すべてなされました。今はどの文書を印刷に付すべきかという、あなたの指示を待つだけです。こられの文書の中には国内のものも、外国のものもすべて集められています…」しかしカメンスキーは彼が集めた文書を印刷する事は出来ませんでした。というのは彼は出版の日を待たずに1814年1月20日に亡くなったのです。

文書館におけるカメンスキーの地位を引き継いだのは、A. Ф. マリノフスキー (A. Ф. Малиновский) でした。彼はルミャンツェフに、次の第2巻の刊行について自分の見解を書き送り、ルミャンツェフはそのほとんどを了承しました(1814年4月4日付書簡)。ルミャンツェフはアジア諸国の文書についてはロシア語の翻訳のみを掲載するというマリノフスキーの意見にも同意しましたが、その一週間後彼はあらためてマリノフスキーに手紙を書き、自分の考えが変わったことを告げ、アジア諸国の文書もロシア語の翻訳の

みでなく、その言語による原文も印刷することを強く望みました。もしモスクワに東洋語の活字がなく、植字工もいなければ、ペテルブルグで印刷するように要請しています。1814年3月19日付のИ. К. ベストマン(И. К. Вестман.)のА. Ф. マリノフスキー宛書簡によると、最初はモスクワでロシア語の翻訳文のみを印刷し、東洋語原文のものについては右半分をあけて残しておき、その部分をペテルブルグで印刷することを奨めています。しかしこのことについてマリノフスキーが印刷業者のН. Ф. セヴォロシスキー(Н. Всеволожский)に尋ねたところ、それは不便のみでなく不可能であるとのことでした。マリノフスキーはもはや東洋語の原文を印刷することは出来ないと思いましたが、それでもルミャンツェフ伯はなおも東洋語の外交文書を原文で印刷することに固執しました。マリノフスキーは1814年4月23日付の書簡で最後に残されている次のような可能性を示唆しました。「東洋語文書の原文を付録としてペテルブルグで印刷し、それぞれの各巻の末尾に付録としてつける。各文書の翻訳は年代順にしかるべき場所におく。もし東洋語の原文が前もって印刷されていれば、それぞれの翻訳の下に付された注によって読者を本来の原文のおかれている巻末のページに導くことが出来る…」さらにマリノフスキーはこの書簡の中で、文書館に保管されている東洋語で書かれた協定と文書について、民族名、文書の月日、ルミャンツェフに送付したリストの文書番号、言語名の4項目に分類した一覧をつけ加えています。例えば、ネルチンスク条約の場合は、(1)中国、(2)1689年8月27日、(3)488号、(4)中国語、満州語、ラテン語のように記載されています。ルミャンツェフ伯は、東洋語の文書の原文を末尾におくというマリノフスキーの提案に全面的に同意を示しました。第2巻の印刷は、第1巻と同様の条件で印刷することをН. Ф. セヴォロシスキーに要請しましたが、彼は印刷費の値上げを希望し、17,500ルーブルの金額を提示しました。実際に第2巻が印刷されるのは1819年ですが、それは印刷所の変更のほか、次のような経緯で第2巻の内容がすっかり変わったことによるものです。

Ⅳ 第2～4巻の内容変更

第2巻の刊行に際してどの文書を収録するかの決定権をもっていたルミャンツェフは、1814年4月11日付のマリノフスキー宛書簡の中で、モスクワの文書館に保管されている文書についてより明確な観念を持つために、必要な種々の資料の提出を求めました。それらの中にはロシア最初の外国使節は誰であるか、何時、何処へ行ったか、又ロシアの外国使節の報告書一覧などもありました。マリノフスキーは、本書第2巻の出版のための文書の選択や書写と同時に、すでに必要な活字の鑄造の準備にとりかかっています。このように仕事の準備は半ば以上進んでいたにもかかわらず、マリノフスキーの編集作業はルミャンツェフによって、全く突然に予期せざる変更を受けました。ルミャンツェフはマリノフスキー宛1815年3月12日付書簡で次のように書いています。「…この文書集を出版する際の私の目的と希望は、国内の法令に関するすべての文書がこの文書集の第1巻に収められることでした。このことは貴下もよく承知の筈です。即ち、第1巻はロシア国内の文書、第2巻以降は外国関係の文書にあてられる予定でした。しかし大変残念なことにその後次のことが明らかになりました。内容からみても第1巻に直接

入れられるべきものがたくさん残されています。例えばポーランド王子ヴラディスラフのロシア王位の継承権協定、ニコンの総主教権の剥奪など、国家文書集の中にこれまで見落とされていたすべてのものを収録するために、第1巻への付録を出版することが必要だと考えます…。ルミャンツェフのこの指示の結果、マリノフスキーは自分に課せられた新たな任務を果たすために、ロシアの外交関係文書を印刷する仕事を中断せざるをえませんでした。1815年3月26日付のルミャンツェフ宛の回答の中で彼は次のように述べています。「この仕事はかなりの時間を要します。なぜなら1726年までの第1巻に欠けている法令は100以上もあります…。ルミャンツェフ伯とマリノフスキーとの往復書簡の中で、初めは国内の文書集のことも主要な話題ではありましたが、今やそれだけが話題となりました。文書集第1巻に印刷されたロシア史に関する文書を補うために、補遺を出版することを決定したルミャンツェフ伯は、初めそれは1巻を越えることはないであろうと考えていました。しかし実際にはそれは彼が考えていたよりもはるかに多いことが分かりました。マリノフスキーは、ルミャンツェフ伯がこの文書集の中にロシア史に関する重要な文書をすべて印刷することを望んでいることを考慮して、類似の文書の探索に全力を注ぎました。そしてこれらの文書は、1巻にとどまらず、最終的には全3巻(2, 3, 4巻)を占めることになったのです。1819年に刊行された第2巻の序文には、第3巻には1682年までの文書の収録が予定されており、それでロシア国内関係の文書は終わり、次の巻には年代順にヨーロッパおよびアジア諸国関係の文書が含まれると予告されています。しかしこの巻も収録文書の量が多かったため、ルミャンツェフ伯はその半分を第3巻として1822年に刊行し、残りを第4巻にまわしました。第4巻が出版されたのは1828年、即ちルミャンツェフ伯(1826年の始めに死去)の死後のことでした。このようにしてルミャンツェフは自分の生きている間にロシアと諸外国との条約集を印刷することは出来ませんでした。彼の遺志はその後継承されました。

V 第5巻の編集と刊行

ルミャンツェフ伯の死後、文書集の編纂業務は外務省に移りました。1826年3月マリノフスキーは当時の外務大臣 K. B. ネッセリローデ(K. B. Нессельроде, 1780–1862)に報告書を提出し、第4巻以降の刊行予定についての質問に答えて次のように述べています。「それは第4巻の売上げ次第によります。しかしその販売からすぐ1,000ルーブルを回収できるかどうかは疑問です。何故なら前巻の売上げは全部で1,072ルーブル52カペイカでしたから、それは難しいのではないかと思います…。このような状況にもかかわらず、マリノフスキーは国家文書集の第5巻を時宜をえて出版する希望を失いませんでした。それ故彼は第4巻が刊行されるとすぐ第5巻の出版準備に取りかかりました。この巻に収録予定の文書は点検のためにすでにルミャンツェフに送られており、彼の死後は外務省の文書館に戻されていました。マリノフスキーはその中から第5巻の一部を構成する107通の外交関係古文書を選び、1832年12月にそのコピーをネッセリローデに送りました。外務省での点検の結果、その中には現在公表することが許されないような文書はひとつもなかったため、1834年2月ネッセリローデはそのコピーをマリノフス

キーに返送しました。その数ヶ月後マリノフスキーは残りの95の文書を点検のために外務省へ送っています。

それから3年後の1837年1月15日、ネッセリローデはロシア帝国アカデミーの総裁 A. C. シシコーフ (A. C. Шишков, 1753–1841) からロシアの外交関係文書の出版について、次のような内容の手紙を受け取りました。「ロシア帝国アカデミーは自らの規約によって、ロシア史の資料の出版に努力することを義務と考えています。外務省により出版された『国家文書と条約集』は第4巻をもって刊行が中止されていますが、アカデミーは出版の継続を自ら引き受けることを提案します。アカデミーが出版を引き受ける条件は、外務省から送付される文書のコピーをアカデミーの印刷所で出版すること、販売される出版物の収益はアカデミーのものとする事です。また外務省はアカデミーが出版を引き受ける代償として、上質紙の出版物25部と普通紙のもの50部を各巻毎に受け取ることにします。もし閣下がこの提案に同意されるならば、この件について陛下の承認を得て、その結果を私にお知らせ下さい」。このシシコーフの提案にしたがって、ネッセリローデはロシア帝国アカデミーに『国家文書と条約集』の印刷を委任することについてニコライ I 世に次のような上奏文を作成しました。「外務省のモスクワ中央文書館により『国家文書と条約集』はすでに4巻が刊行されています。これは1696年までの文書を含み、第5巻からはロシアとヨーロッパ及びアジア諸国との条約集の印刷が始まることになっていますが、そのための十分な予算がないために印刷は中止されています。帝国アカデミーは自らの規約によりロシア史の資料の出版に努力する義務を負っていますので、『国家文書と条約集』の印刷の継続を引き受ける希望を表明しました。わが国のロシア史研究にとって重要で興味ある文書の出版がもたらす有効性を考えて、私は次のような条件で『国家文書と条約集』の継続出版をロシア・アカデミーに委任するために陛下の許可をお願いします…。その結果『国家文書と条約集』第5巻の出版許可がアカデミーに伝えられ、一方マリノフスキーは、アカデミーに渡すことが予定されていた文書のコピーを予備的な点検のために外務省に提出することを命じられ、前記の107文書につづいてさらに57文書を送付しています。しかしアカデミーにおける第5巻の印刷は、恐らくは1841年のアカデミーの改組のために中断され、その時までには最初の47枚(141文書を含む)ができていただけでした。その後すべての業務は改組された帝国科学アカデミーの第2部(ロシア語および文学)へ委任されましたが、そこでは1842年1月17日の会議において印刷された47枚を点検して多くの誤りを発見しました。第2部は誤りを刷り直したり、文書を年代順に排列し直すことなどで結局は47枚全部を刷り直す必要を認めましたが、その編纂を続けるにはかなりの困難と出費があるために再び第5巻の刊行は延期となりました。

そのうち1847年に皇帝直属官房第2部は皇帝の許可をえて、外務省モスクワ中央文書館に保管されていた『外交使節報告』(Посольские статейные списки)の出版に着手しました。この新たな出版が『国家文書と条約集』の第5巻と非常に近い関係をもっていることを考慮して、当時外務省モスクワ中央文書館長 M. A. オボレンスキー公(M.

A. Оболенский) は外務省の手中にあった『国家文書と条約集』第5巻の出版の継続を考えて、1852年1月29日科学アカデミー第2部の部長 M. И. ダヴィドフ (M. И. Давыдов) にこの出版について照会しました。彼はまた1852年3月ペテルブルグ滞在中に当時の外務大臣 Л. Г. セニャーヴィン (Л. Г. Сенявин) に報告書を提出し、その中でこの巻の印刷の歴史とその出版継続の遅れの原因を要約して、第5巻の継続出版の費用をすべて引き受けることを提案しています。しかし両者の承諾を得たオボレンスキーは第5巻の出版を継続することなく、アカデミーから受け取った47枚 (141文書) の印刷物をタイトルも序文も表紙もつけないで仮綴じにしました。その後これらの仮綴じのものが発売されることになりましたが、1893年までに文書館の仮綴じ本の在庫もなくなったようです。その結果『国家文書と条約集』の出版委員会の議長 C. A. ベロクーロフ (C. A. Блюкуров) は委員会に覚書を送り、その中で第5巻の新たな仮綴じを出版するに際しては、すでに印刷されたものに加えて、1842年に科学アカデミーの第2部が付加することを予定していたすべてのものを印刷する許可を求めました。それは即ち、(1)すでに出版された第1巻から4巻の出版の歴史を述べた序文を付すこと、(2)187ページと188ページに不完全に印刷された文書を完結すること、(3)この巻に収録された文書に標題を付すこと、(4)タイトルページと表紙をつけることなどでした。このようにして第5巻は、1837年から1841年にロシア・アカデミーが印刷した141文書 (本書の1～188ページ) に新たな文書を追加することなく、ただ詳細な序文と文書のリストをつけて刊行されることになったわけです。アカデミーがこの巻のために予定していた残りの47文書はついに印刷されずに終わりました。その結果この第5巻には、1326年から1584年までのロシアの外交関係の141の文書のみが含まれています。これらの収録文書の内容は以下の通りです。

- (1) オーストリアからの27文書 (1489～1582)
- (2) イギリスから11文書 (1557～1584)
- (3) ドイツのブラウンシュヴァイク選挙侯とブランデンブルグ辺境伯から2文書 (1520)
- (4) ハンガリーから2文書 (1488)
- (5) ハンザ同盟都市から1文書 (1514)
- (6) ギリシャのアトス山修道院から1文書 (1515)
- (7) デンマークから13文書 (1493～1573)
- (8) イスパニアから3文書 (1504～1505)
- (9) カザン・タタール王国から2文書 (1491～1492)
- (10) カフファのサルタン (Кафинский султан) から2文書 (1499)
- (11) クリミア汗国から16文書 (1474～1531)
- (12) リフリャンディアから4文書 (1509～1531)
- (13) マゾヴェツキー公から2文書 (1493)
- (14) メクレンブルグ公から1文書 (1492)
- (15) ノガイ汗国から11文書 (1489～1505) *

- (16) ノルウェーから1文書(1326)
- (17) ドイツ騎士団から7文書(1449～1576)
- (18) ポーランド＝リトワ国から14文書(1449～1576)
- (19) サクソン公から1文書(1492)
- (20) セルビアとアルタの専制君主(Сербский и Артский деспот) カール・パレオロギーから1文書(1516)
- (21) タマニ公から2文書(1487～1488)
- (22) トルコから14文書(1492～1530)
- (23) フランスから1文書(1517)
- (24) スウェーデンから2文書(1513, 1524)

(*ノガイ汗国からの文書は10通と記されているが、文書番号のNos. 11, 12, 15～17, 25, 及び46～50を数えると11通になる)。

その他にも外交関係文書はすでに述べたように第1～4巻の中にも含まれており、それらの中には次のようなものがあります。例えばポーランド＝リトワ王国とロシアとの関係についての文書(T. I, Nos. 19, 31; T. II, Nos. 76-140, 152, 156-164, 169-173, 178-180, 187, 199-201, 203, 205-223, 225, 231-235, 240, 243, 245-250, 253-255, 257-260, 267, 270-274, 286), カザン, ノガイ, アストラハンとシベリア王国との関係文書(T. I, No. 143; T. II, Nos. 26, 27, 31, 42, 45, 66-68, 265), リガとの関係文書(T. II, Nos. 1, 3, 8; см. также Nos. 14, 21, 48), スウェーデンその他との関係文書(T. II, Nos. 168, 188-193, 264, 280) などです。

しかし外国関係文書にあてられた本書第5巻の刊行がこのように遅れたために、それが刊行された1894年には、その中に含まれた文書の多くはすでに他の出版物の中に印刷されていました。例えば1851～1871年には皇帝直属官房第2部によって『古ロシアと諸列強の外交関係文書』(*Памятники дипломатических сношений древней России съ державами иностранными*, 10 冊, СПб., 1851–1871 年) が刊行され、また『ロシア帝国歴史協会叢書』(*Сборники Императ. Русскаго историческаго общества*, 148 冊, СПб., 1867–1916 年) のなかにも15–16世紀中の外国関係文書が多数含まれていました。グルジア, クリミア, カフカス, ペルシアなど東方諸国との外交文書(*Переписка грузинских Царей съ российскими Государями съ 1639 по 1770 гг.*, СПб., 1861年), А.А. ツァガレーリ(A.А. Цагарели)の編集による18世紀グルジア関係歴史文書(*Грамоты и другие исторические документы XVIII в., относящиеся къ Грузин*, СПб., 1891年), С.А. ベロクーロフ(С.А. Блюкуров)によるロシア・カフカス関係資料(*Сношения России съ Кавказомъ*, Москва, 1889年), Н. И. ヴェセロフスキー教授(Н. И. Веселовский)により出版された1616年までのペルシャとロシアとの関係文書(*Памятники дипломатических и торговых сношений Московской Руси съ Персией*, 3 冊, СПб., 1890–1892年), В. В. ベリヤミーノフ＝ゼルノーフ(В. В. Вельяминов – Зернов)によるクルミア汗国史資料(*Материалы для истории Крымскаго ханства*, СПб., 1864年)などのようにそれぞれ独立した文書集

がすでに出版されていました。さらに1874年からは Ф.Ф. マルテンス教授によって、モスクワ中央文書館の所蔵する原本およびコピーにもとづく『ロシアと諸列強間で締結された条約・協定集』(Ф.Ф. Мартенс : *Собрание трактатовъ и конвенцій, заключенныхъ Россією съ иностранными державами*. 15 тт. Москва, 1874–1900) という外交文書全集の刊行が始まっていた。それは1648年以降の外交文書を集大成するものだったので、『国家文書と外交文書』第5巻の序文を書いた Ф. Бюлер男爵(Ф. Бюлер)は、「今やわれわれに残された仕事は、1648年以前の文書(全部で150)の出版によってこの外交文書全集を補足することのみである」と述べています。しかしそのことは遂に実現しませんでした。

* * * * *

以上ながながと『国家文書と外交文書』の編集と刊行についてお話ししてきましたが、それは第1巻から第5巻までほとんど一世紀間を要しながら、なお完成をみるに至らなかったこの文書集の成立過程を紹介したいと思ったからです。本書はロシアにおける最初の国家文書の刊行事業であったために、編集方針の試行錯誤があったほか、国費による出版物でありながら、各巻の売上げを次巻の刊行費にあてるといった財政上の困難もありました。もともと本書の編集を企てたルミャンツェフ伯の目的は、ロシア外交文書の刊行にありましたが、原文書をそのまま印刷するという彼の希望は種々の困難のために遅延し実現しませんでした。印刷すべき文書は15以上の外国語で書かれており、しかも古風な表現の外国文書を解読する人物を探すのは困難で、外部の人々の援助を必要としたからです。とはいえそれはロシアにおける外交文書編纂の最初の試みであり、たとえそれが未完成なものとして終わったとしても止むをえなかったというべきでしょう。

最後にこのルミャンツェフ伯について蛇足を一、二付け加えておきます。彼は日本にも関心をもっていたらしく、アレクサンドルⅠ世がレザーノフ使節を日本に派遣するに際し、当時シベリアに滞在していた10名の仙台漂流民たちを首都に召喚したとき、彼らの宿所となったのが彼の邸宅でした。また今日ソ連が誇るレーニン図書館も、ルミャンツェフ伯の個人文庫がもとになって発展したということです。

—注—

- 1) Riemer, : *Foedera, conventiones et cujusquam generis Acta Publica*. 20 vols. London, 1704–1726.
- 2) Dumont, Jean, baron de Carlsroon : *Corps universel diplomatique du droit des gens*. 8 vols. Amsterdam, 1726–31.
- 3) Barbeyrac, Jean : *L'Histoire des anciens traités, ou Recueil historique et chronologique des traités ... jusqu'à l'empereur Charlemagne*. 2 vols. in 1. Amsterdam, 1739.
- 4) Martens, Georg Friedrich von : *Recueil des principaux traités d'alliance, de paix, de trêve, ...conclus par les puissances de l'Europe, depuis 1761 jusqu'à 1791*. 7 vols. Gottingue, 1791–1801.